

あるかいど 第四十五号 特集号 目次

東日本大震災特集エッセー

執筆のお願い	高島 寛	5	
うしろめたく	佐伯 晋	6	早春の雲に
「鎮魂を歩く」短歌十八首	軽尾たか子	14	二度の大震災を経験して
「グリーン」のなかの芽	木村 誠子	18	頑張れない東北
無	船越 恒子	22	一撃から半年過ぎて
きつと大丈夫!	向井 幸	24	ずっと揺れてた
			多紀 祥子
			小島 千佳
			奥畑 信子
			荻野 央
			真行 りあ
			38 37 34 29 26

〔小説〕

海を渡る蝶

木村 誠子

68

宙そらに落ちる

高原ちよみ

96

三つの髑髏の物語

佐伯 晋

105

赤い風

折合総一郎

112

うつつせみ

細見 牧代

125

宴の女たち

奥畑 信子

144

見えない相手

山田 泰成

151





大切な誰かのために 重い十字架	高原ちよみ	42	災害と技術 そして	池 誠	55
東日本大震災に思う	亀谷 美子	44	違った景色	折合総一郎	57
東日本大震災に思う	浦上 京子	46	夢のあとに	加川 清一	59
アルコールと震災	山田 泰成	50	今年の夏	池戸 亮太	63
	村井理恵子	54	非常時に想うこと 短歌五首	楠本 一功	63

冬陽の中

朽ちていく家

銭よ、いずこに

霧のオベリスク

蠟燭三本

〔旅行記〕

みちのくの旅

——被災地を訪ねて

高畠 寛

229

楠本 一功

164

亀谷 美子

174

池 誠

183

荻野 央

194

蔵田 弓子

219

あるかいど四十四号の反響・他

編集後記

同人名簿

251

252

253



【あるかいど四十四号反響・他】

■関東文芸同人誌交流会の掲示板

木村誠子「サハラの夜明け」

投稿者東谷貞夫

『あるかいど』44号（大阪）「サハラ
の夜明け」は旅行記という枠を突破し、
ひとつの精神的な物語になつていて

二人の娘が結婚し、夫とも死別したり
ツは大晦日にサハラ砂漠に旅立ち、砂
漠の虚無の世界を観察しながらも、夫
との人生を振り返り、またモロッコに
纏う話を織り込み、そこには煩わしい
世間の思惑に囚われない自在な心の流
れが頷れています。

シングル池田またティーチャーなど、
書き手と同じ一人旅の同伴者も巧みに
描かれており、小説を読んでいるよう
な面白さがあります。むしろリアリテ
イを出そうとする凡庸な書き手のケチ
な姿勢を超え、この書き手の気ままた
しかも上品な感覚の文章は読み手の好
奇心をぐいぐいと引っ張り、サハラの

砂漠の無限な虚無に浸りたいという気
持ちにさせてくれます。

小説という形式をつまらなくさせる
洒落た作品です。

今回は関東文芸同人誌交流会の掲示
板という初めてのところから反響があ
った。普通は発行日から三ヶ月後ぐら
いに反響が届くのだが、投稿日八月六
日（土）とあり、発行日は七月二十日
だから、驚くほどの早さだ。どうい
うルートで手に取っていただいたのか、
とにかく有り難い。

■『あるかいど四十四号』に掲載され
た池戸亮太「聖三月」が『民主文学』
に入選し、十二月号に全文掲載される。
六年前に楠本一功「傘はいらない」が
掲載され、今回二度目である。また今
年は佐伯晋「白い海へ」が『季刊文科』
に掲載されている。応募するより、同
人誌経由の方が早いかもしれない。

■次はあるかいどの反響ではないのだ
が、今回震災特集を組むにあたって、

気仙沼の新聞社「三陸新報」さんを訪
問した。

その後送つていただいた、東日本大
震災を記録した『巨震激流』から、写
真二枚を転載するに当り、佐伯さんが
許可を求めた件に対する返書である。

拝復

その節は、遠路おつかれ様でござい
ました。「百聞は……」と言いますが、
被災地に心を寄せていただき有りがた
く思っております。

お申し越しの件は承諾致しました。
「また、ここから」誰もが、自分に言
いきかせていると思います。写真集の
ご紹介有がとうございます。ご丁寧な
お問い合わせに、重ねて御礼申し上げ
ます。

草々

三陸新報社が総力をあげて発刊した
「巨震激流」の初版は、七月二十三日
の発刊と同時に在庫がなくなるほどの
売れ行きで、既に第三刷に入ったと聞
く。喜ばしい限りである。

●阪神大震災の時に議論したのだがこれで震災文学が生れるのかどうかということ。私は否定的で、たいいていの人でも否定的で、事実その通りになった。日本のもの書きは、社会的な事件に対してはあまり関心を示さないのだ。私は日本伝統の「私小説」の文化風土だと思う。日本の文学が世界文学に仲間入りできない先天的な欠陥だと考えている。日本の文学は《世界の人が共有できるような内容ではない》のだ。つまり『世界同時存在』たりえない。●その中で、たつた一人気を吐いているもの書きがある。わが文校チューターの木辺弘児である。ドキュメンタリーの『廃墟のパスペクティブ』であり、フィクションの『無明銀河』である。これは日本の文学史に、そして世界

の文学史に残る作品だと思う。そのための努力をしたい。●そして今回の東日本大震災である。阪神の大震災に比べ、原子力発電所の事故を含め、ひとまわり大きな事件であり、世界中から関心を寄せられた。多くの国からさまざまな援助を受けた。今度は日本のもの書きは、それを自分の文学のモチーフと考えるか。やはり今回もNOだろう。他の分野にくらべ、文学だけがとり残されているのだ。そういう風土なのである。●《死んでいく(餓死) 子供を前にして、『嘔吐』はなんの意味もない》(サルトル、一九六四年、ル・モンド紙、パリ討論会)サルトルの根元的な発言は、当時まだ文校生であった私や仲間の中に、さまざまな意見を生んだ。これに答えたのがリカルドゥーの言葉である。《文学はその死に対して、ある意味を与えるものである》(リカルドゥー「言葉と小説」

一九六九年)●この解答は優等生的なものであって、サルトルがそれに対してどう反応したのか知らないが次のことだけはいえると思う。文学は餓死する多くの子供を書くものではなく、一人の子供の死を書くものである。ピアフラの餓死する多くの子供を書くのは、文学の手に余る事件である。●今回巻頭のエッセー執筆のお願いの中で、このことを書いた。マスコミのナイヤガラのようなニュースの中には、一人一人の物語がない。一人一人の顔がない。そのことに危機感を抱いたというのはこのことなのだ。●私たちが書かなければならないのは、今日は何人死んだという数ではなく、その物語であり、その顔である。一人一人の人間である。それが東北の人びとに寄りそうということだろう。私たちがもの書きであれば、それが出来るはずだ。これが小説なのだから。